

研究ノート

パブリック・アーケオロジーの可能性

五十嵐 聡 江・小野 寿美子

豊島は、名前の通り自然豊かな島である。しかし、その名を全国に広めたのは、島の豊かさとは裏腹に、有害産業廃棄物不法投棄事件である「豊島事件」であった。豊島事件の舞台となった水ヶ浦地区には、国立公園に指定された豊かな自然があっただけでなく、3ヶ所の遺跡もあったことがわかっている。

また、豊島全体としては現在、先史・古代の遺跡が18ヶ所確認されているが、島内で遺跡の存在を知る人は少なく、豊島で採取された資料についても、詳しい説明もなく、またそうした知識をもっている人もいないため、

活用が十分にできていないのが現状である。

そこで、我々は2007年から香川県小豆郡土庄町豊島でパブリック・アーケオロジーを行い、これまで様々な実践活動を積み重ねてきた。これらの実践を通して、これからのパブリック・アーケオロジーによる考古学の調査研究活動は、調査・研究と活用を対極に捉え、活用を考古学知識の啓蒙活動のみに限定するものではないことを理解した。また、市民とともに活用していくなから調査・研究テーマが生まれ、活用と調査・研究の循環が図られる必要性を提示した。

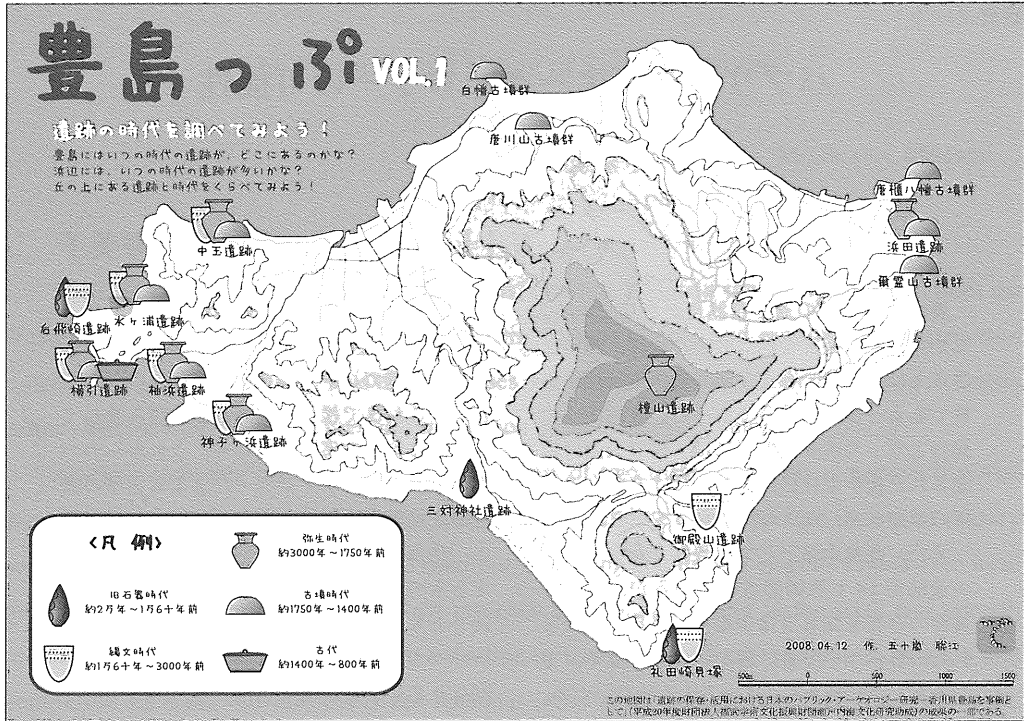
I. 豊島における考古学の活動

我々は2007年から、瀬戸内海東部の小豆島の西方約4kmに位置する香川県土庄町豊島で、パブリック・アーケオロジーの考えのもと、文化財保護活動および考古学研究を行っている(五十嵐・小野2009)。豊島には現在、先史・古代の遺跡が18ヶ所確認されており(第1図)、これらの遺跡は戦前から、島外の研究者によって踏査が行われてきた。これらの調査成果は、様々な形で報告されており(丹羽1985, 石野・福田・三木1998)、その資料は現在、島外の博物館・資料館で保管されている。

豊島には博物館・資料館等の適切な資料の保管場所がなかったため、豊島の資料は島外の博物館へ相次いで寄贈されることになった。このことは、文化財保存上適切な処置であったといえようが、島内でこれらの資料の活用を難しくしたのも事実である。その結果、島内の住民に遺跡を知ってもらう機会が著しく減少したことは否めない。また、島内でも、豊島で採取された資料が豊島中学校の図書館に展示してあるが、詳しい説明もなく、またそうした知識をもっている人もいないため、活用が十分にできていないのが現状である。

そこで、このような豊島における文化財の保護、とりわけ活用に関する状況を踏まえ、豊島においての考古学の調査研究を行っていくためには、パブリック・アーケオロジーの推進が必要不可欠であると認識し、調査研究を行ってきた(五十嵐・小野・遠部2011)。

パブリック・アーケオロジーを実践していく上で、後述するように考古学の知見だけでは課



第1図 豊島っ ぽ

題解決に至らないことは調査開始当初より想定していた。そこで、豊島の自然や環境についての研究（市村 2007）、中世以降豊島の主要産業であった豊島石についての研究（松田 2009）、貝化石をもとに環境復元を行う研究（畑山 2009）、そして近現代の豊島を理解するのに欠かせない民俗学の研究等、豊島をフィールドに様々なテーマを持って研究する人々とのつながりを持って取り組み、多角的な視点で豊島の歴史を解明することを目指してきた。考古資料の活用も従来の考古学の成果の発表の場に限らず、様々な分野で公開するとともに（遠部・小野・五十嵐 2009）、より島民がアクセスしやすい方法での活用を試みている（五十嵐・小野 2009a）。

まず、豊島の魅力を紹介する地図「豊島っ ぽ」（第1図）を作成し、島内の様々なイベントや島の玄関口である家浦フェリー乗り場で配布した。次に、豊島事件の歴史や島の環境を伝えるために作られた「トランク・ミュージアム」の中に豊島の遺跡に関する展示コーナーを設け、イベントでの展示を行ったほか、フェリー乗り場でも常設展示している（小野・五十嵐・遠部 2009、遠部・小野・五十嵐 2009）。

また、豊島事件の反省をもとに豊島に創設された環境問題を勉強する「島の学校」では、島の歴史を学ぶ授業を担当し、研究成果をわかりやすく解説し、遺跡の周知をうながしている。さらに、環境問題に関心を持ってもらうことを目的に、毎年豊島で開催されている「アースデイかがわ in 豊島」にも参加し、参加者とともに遺跡の踏査を行い、豊島の遺跡の現状について知ってもらうことを目指している（五十嵐・小野・遠部 2010）。

II. 活用から研究課題の抽出へ

1. 「豊島っぷ」の作成から島の文化財の把握

「豊島っぷ」を作成するためには、まず豊島の魅力を構成する遺跡や文化財を総合的に調査し、把握することが必要であった。それは、特定の遺跡に対して考古学的調査や研究を行う場合とは異なり、ある特定の時代や特徴を有する遺跡に焦点を絞るのではなく、豊島に存在する遺跡を網羅的に調査することである。そのためにまずは過去の調査成果をふまえ島内を踏査し、従来の遺跡地図を修正しながら、豊島の遺跡分布図を作成した。そしてこの遺跡分布図をもとに島民が一目見て遺跡の時代や分布を知ることができるようにした地図が「豊島っぷ」である。

この「豊島っぷ」の作成を通して、一方では、豊島の遺跡や文化財を把握するとともに、様々な時代における豊島の歴史を読み解くことを目指し、他方では豊島の情報を瀬戸内海地域のほかの遺跡に発信することを試みている。また、現段階では調査や研究が十分なされていない遺跡であっても、今後調査を実施することにより、さらに豊島の魅力を引き出せるということもわかった（五十嵐 2008, 五十嵐・松田・遠部 2008）。

2. 中学生との踏査

「豊島っぷ」をきっかけに豊島中学校では、総合学習の時間に島の遺跡を調べることが行われた。どのように入手したのかわからないが、豊島中学校の生徒の一人が豊島っぷを持っていたことが、遺跡を調べるきっかけになったようである。島の中学生が「豊島っぷ」をきっかけに島の歴史に興味をもってくれたことは予想以上の成果であった。

中学生と一緒に海岸沿いの遺跡を踏査すると、土器の破片や石器を多数採集することができた。遺物は波によって浸食され風化しており、年代決定の決め手に欠けるものが多かったが、いくつかの特徴的な遺物を採集することができた。なかでも製塩土器の破片は多く、過去に発掘調査はされていないが、製塩遺跡の存在をうかがわせるに足る資料だといえる。採集資料の図化とともに、豊島における製塩遺跡研究を進める必要があるといえよう。



第2図 豊島中学生採集資料 (1)



第3図 豊島中学生採集資料 (2)



第4図 採集資料の説明

Ⅲ. 課題にとりくむために：調査・研究，そして新たな島の歴史へ

1. 豊島出土の遺物の調査

(1) 豊島中学校展示資料

豊島中学校には、図書室の一角にガラス製の資料陳列棚が置かれている。この資料陳列棚の中には過去に島内で採集された遺物や、教材用に作成された複製品等が展示されている（第5図）。遺物については、一部、過去に採集者が報告しているものがあるが、未報告のものもいくつかあったので、それらの資料調査を行った。

資料調査は2009年4月24日に豊島中学校の図書室内で行った。展示されている遺物のうち、主に古墳時代から古代にかけての資料を写真等で記録し（第6図）、資料台帳を作成した。

第6図の1-4は須恵器で、5・6は製塩土器である。1と3は豊島島内で採集されたこと以外、採集時期・採集場所などは不明である。2と4は、2000年6月3日に神子ヶ浜の西隣の浜で採集されたも



第5図 豊島中学校での展示の様子

のである。5・6の製塩土器は、ともに昭和28年8月18日に神子ヶ浜で採集されたことが記録されている。

1は短脚の高坏で、口縁部が欠損しており、断定はできないが無蓋の可能性はある。胎土は、やや白みがかかった灰色で、径1-3mm程度の白色粒子を含み、断面観察より胎土はやや粗く、焼成は良好である。外面の調整は、坏部から底部まで、内面は坏部上端と脚部がナデ、坏部下端が左方向のヘラケズリで、底部には指ナデ痕が確認できる。岡山県美作市明見の西山2号墳出土資料に近く、TK209型式併行と考えられる。

2は甕もしくは壺の口縁部の破片で、やや白みがかかった灰色に、径1mmの白色粒子を少量含み、胎土は緻密で焼成は良好である。内外面ともにナデ調整が施されている。

3は甕の胴部の破片で、色は白色で、磨耗が激しく胎土は不明である。外面は平行タタキが施された後カキメ調整が行われており、内面は半径約2.5cmの当て具痕がみられる。

4は坏の底部で、底径約8.6cmと推定され、厚さは5mmである。灰白色の緻密な胎土で、焼成は良好である。磨耗が著しく調整は不明であるが、形状より古代以降のものであると考えられる。



第6図 豊島中学校展示資料

5は製塩土器で、暗赤褐色土で、口縁部が欠損し、また激しく磨耗しているため調整は不明である。器壁の上部が極端に薄く、下部になるにつれて厚くなる。脚部に坏の受け部を差し込んで接合しているのが確認できる。

6も製塩土器で、坏部の大部分が欠損しており、調整も不明である。褐色土で、5と同様に脚部に坏の受け部を差し込んで接合しているのが確認できる。

(2) 瀬戸内海歴史民俗資料館収蔵資料

瀬戸内海歴史民俗資料館には、1947年に香川県教育委員会によって豊島横引遺跡を発掘調査した際に出土した遺物や、主に1970年代に豊島で採集された資料が寄贈され、保管されていることが、調査を行って行く中ですでにわかっていた。先史時代の遺物に関しては、共同で調査研究を担っている遠部氏が2008年に行っており、その際に多量に保管された古代の遺物(土師器・須恵器・製塩土器等)があることを把握している。そこで、今回、豊島関係の収蔵資料のなかでも古墳時代以降の遺物を中心に、その所在の確認と総量を把握するための調査を計画した。

調査は、2009年5月24日に、瀬戸内海歴史民俗資料館の協力のもと実施した。調査では総点数963点、内訳として土師器81点、須恵器108点、製塩土器250点、土錘35点があることが判明した。中には、過去に文献で紹介されていながらも所在不明であった資料もあり、また、今回は個人情報も含むので公表は控えるが、詳細な採集日や旧所蔵者等も確認した。これらの遺物は、過去に行われた豊島での調査の実態も解明できる貴重な資料であるといえよう。

このような調査は、従来考古学が行ってきた調査・研究活動である。パブリック・アーケオロジーにおいては、活用のための基礎になり、地域の情報を収集する一端を担っている。

第1表 瀬戸内海歴史民俗資料館収蔵の豊島関係資料一覧

種 別	点数
弥生土器	40
土師器	81
製塩土器	250
須恵器	108
土錘(管状・有溝・溝状・棒状)	35
イイダコ壺	54
その他	395
合 計	963

2. 豊島山根遺跡の調査

産業廃棄物不法投棄事件である豊島事件を経験した豊島にとって、ごみはとても身近な問題である。産廃と一般家庭ごみ、そして遺棄されたという点では考古遺物も同様にごみである。もちろん、全てを同列に扱い議論することはできない。しかし、島の学校や豊島楽会といった島内のイベントで島民と接していく中で、豊島



第7図 豊島山根遺跡

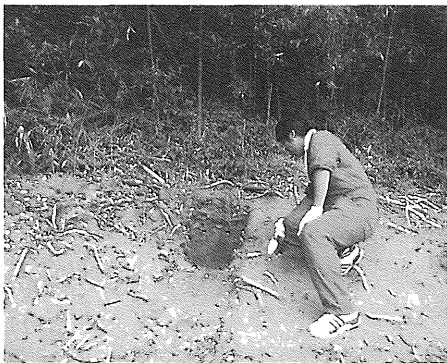
では遺跡と島民とをつなぐ「ごみ」というキーワードが明らかになってきた。そこで、ごみをテーマにして豊島の遺跡を真正面から捉えるために、現代のごみ穴の調査を行った。調査地は島内の個人宅の敷地内で、裏庭にあたるところにあったごみ穴である。斜面に形成されたごみ穴は、土を掘り込んだ跡が明確ではなく、斜面に廃棄したごみをこれまた廃棄された瓦によって風で飛ばないように抑えたのか、ごみと瓦の層が交互に重なって形成されたものであった。



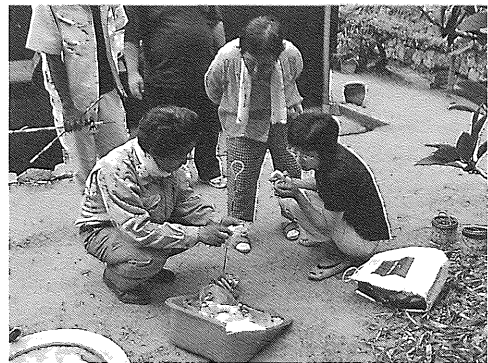
第8図 貝類と瓦の堆積状況

ごみ穴の中からは、近代以降の陶磁器、ガラス瓶、ビニールやプラスチックの類、建材に使用された鉄釘類に加え、貝殻類が多数出土した。発掘調査とあわせて民俗学による聞き取り調査も行い、1950年から1970

年代までの豊島におけるごみ問題について復元を試みている。現在は、遺物の整理中であるが、現代の遺跡を調査することは、過去の遺跡について考える上でも非常に有効であることを実感しており、また新たな豊島の歴史が紐解けるであろうことを確信している（小野・五十嵐・畑山ほか2011）。



第9図 発掘調査風景



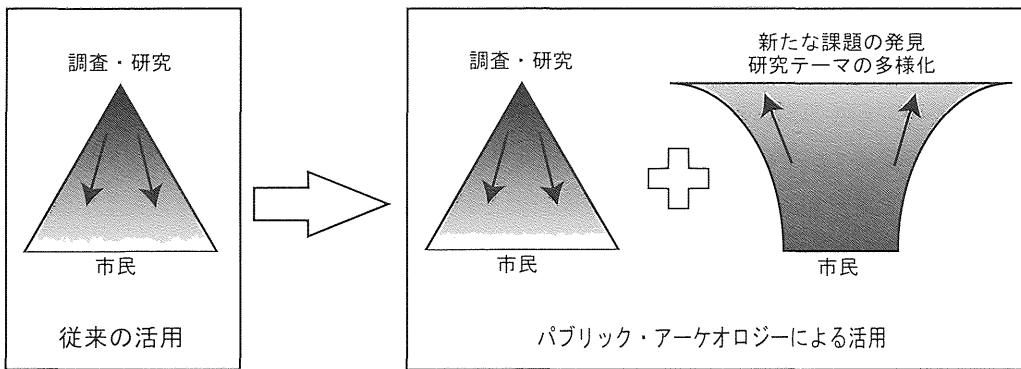
第10図 調査現場での聞き取り調査の様子

また、調査期間中には、土地所有者の方の了解を得て、調査現場を公開し、現地説明会を実施した。この現地説明会では、従来のように考古学者が一方向的に遺跡を説明するというよりも、遺跡を前に島民の方に1950年から1970年代ごろの島の生活を語っていただくという、聞き取り調査としての側面が強いものであった。

この発掘調査は、市民のニーズの中からうまれ実現した。「現代のごみ」を調査するという活動は、従来の考古学の調査・研究活動だけではうまれてこなかったといえる。「市民とともに」というパブリック・アーケオロジーの概念があったからこそこの成果だと考えられる。

Ⅳ. パブリック・アーケオロジーの可能性

われわれは5年間、豊島でパブリック・アーケオロジー活動の実践を行ってきた。当初は、豊島に関する考古学の先行研究を紐解き、研究者以外の島民にわかりやすく豊島の遺跡や文化財の存在を、そしてそこから窺い知ることのできる島の歴史や文化を伝えるために「豊島っ歩」の作成や、「島の学校」での講義を続けてきた。そして、これらの活動をきっかけに、島民とともに未調査の遺跡や未報告の考古資料の調査を行うことへと発展していった。このことは、考古学の調査研究をもとに成果の活用を図るという従来のあり方とは異なり、活用を図ることでそれまで調査や研究がされていなかった遺跡が注目され、考古学の研究が進展するということを証明できた事例だといえよう（第11図）。



第11図 パブリック・アーケオロジーによる活用の変遷

以上のことは、地域に根ざした考古学研究にとっては自明のことであり、真剣に論じられることは少なかった。しかし近年、筆者が関わっている埼玉県さいたま市緑区の馬場小山山遺跡におけるパブリック・アーケオロジー活動においても同様の成果がみられ（五十嵐ほか2009）、考古学の調査研究と活用の関係は新たな局面を迎えているといえるのではないだろうか。これまでは考古学の調査・研究活動の成果を教育・普及という形で社会に還元するにとどまってきた。しかし、我々はパブリック・アーケオロジーによる教育・普及活動の中から派生してくる新たな調査・研究活動という存在に気づいた。すなわち、調査・研究と成果の活用を対極に捉え、活用を研究者による市民への一方的な考古学知識の啓蒙活動のみに限定するのではなく、市民とともに活用していくなから新たな調査・研究テーマが生まれ、活用と調査・研究の循環が図られるというものである。これにより、文化財や考古学が市民にとってよりいっそう身近なものになり、地域の歴史や文化を考える際の資料の一つとして市民がこれらを活用することができるようになるのではないだろうか。それは、考古学の目指すべき未来を提示するものである。賛否両論あるかもしれないが、この提示が、今後のパブリック・アーケオロジー研究の一序になれば幸いである。

謝辞

本稿をなすにあたり、豊島中学校の皆様、発掘調査をさせていただいた山根家の皆様、調査においてご協力いただいた豊島の方々と瀬戸内海歴史民俗資料館の長井博志様、そして共に豊島で調査研究を行っている皆様には、大変お世話になりました。末筆ではありますが、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

また、平成23年3月11日午後2時46分、東北地方を震源とする地震と津波により、東日本は未曾有の災害に見舞われました。復興の中では遺跡の存在が地域再生における課題として取り上げられていますが、今日ほどパブリック・アーケオロジーの必要性を感じられることはないと思います。パブリック・アーケオロジーが震災の復興に少しでも役立つことを願い、また、被災された多くの方々に心よりお見舞いを申し上げますとともに、お亡くなりになられた方のご冥福をお祈りいたします。

筑波大学入学以来、川西宏幸先生のご指導のもと調査・研究活動を続けてきました。最初の頃は、先生の授業内容が難しく、己の知識・理解力のなさに頭を悩ますことがしばしばでした。時には激しく議論し、ぶつかり合う機会も何度かありました。しかし、大学を離れてみると、あの当時のディスカッションが現在の我々を形成しているのは間違いないと思います。川西先生の指導のもと、先輩・後輩と切磋琢磨できたことは、とても幸せなことであったと実感しています。川西先生が京都からつくばへいらして以来、我々が先生の思い描いているような研究成果を挙げているとは思っていませんが、今までのご指導に深く感謝しています。ありがとうございました。

引用文献

- 五十嵐聡江・小野寿美子 2009a 「豊島つぶの活用と遺跡の保護」『豊島学(楽)会第3回研究発表会』II-11-II-13頁。
- 五十嵐聡江・小野寿美子 2009b 「パブリック・アーケオロジーの実践に向けて—香川県小豆郡土庄町豊島を事例として」『筑波大学 先史学・考古学研究』第20号 113-120頁。
- 石野博信・福田彰浩・三木素美子 1998 「小豆島の考古学」『小豆島:徳島文理大学文学部共同研究』徳島文理大学文学部コミュニケーション学科 31-110頁。
- 市村 康 2007 「豊島の里海デジタルアーカイブと保全活動」『瀬戸内海文化研究・活動支援助成報告書 <平成18年度>』財団法人福武学術文化振興財団 50-53頁。
- 丹羽祐一 1985 「小豆郡土庄町豊島の縄文時代遺跡群」『香川の歴史』第5号。
- 畑山智史 2009 「犬島貝塚の貝」『犬島貝塚—瀬戸内海最古の貝塚を求めて—』六一書房。
- 松田朝由 2009 『豊島石造物の研究I』(財団法人福武学術文化振興財団平成19年度瀬戸内海文化・研究活動支援調査・研究助成報告書)。

ポスター発表

- 五十嵐聡江 2008 「豊島におけるパブリック・アーケオロジー事始め—「豊島つぶ」の作成とその活用」『豊島学(楽)会第2回研究発表会』。
- 五十嵐聡江・松田朝由・遠部 慎 2008 「豊島つぶの作成と活用」『瀬戸内海研究フォーラム in 福岡』。
- 五十嵐聡江・小野寿美子・遠部 慎 2010 「アースデイかがわ in 豊島におけるパブリック・アーケオロジーの実践」『考古学研究会第56回研究集会』。
- 五十嵐聡江・小野寿美子・遠部 慎 2011 「豊島における文化財保護—パブリック・アーケオロジーの視点から—」『考古学研究会第57回研究集会』。

五十嵐聡江・齋藤弘道・常松成人・鈴木正博・馬場小室山遺跡研究会 2009

「馬場小室山遺跡の製塩土器研究と「みぬまっぷ」による研究支援—パブリック・アーケオロジーに学ぶ先史考古学のモデル—」『日本考古学協会第75回総会』.

小野寿美子・五十嵐聡江・畑山智史ほか 2011 「香川県豊島における現代貝塚の発掘調査」『日本考古学協会第77回総会』.

小野寿美子・五十嵐聡江・遠部 慎 2009 「島と島を繋ぐトランク・ミュージアム」『考古学研究会第55回研究集会』.

遠部 慎・小野寿美子・五十嵐聡江 2009 「トランク・ミュージアムの活用—瀬戸内海におけるケーススタディ—」『日本環境教育学会第20回大会』.

The Potential of Public Archeology

IGARASHI, Satoe

ONO, Sumiko

Teshima is an island located in the Inland Sea of Japan well known for its rich natural beauty. However, contrary to the natural richness and beauty of the island, it is also infamous as the site of a major industrial waste scandal known as the “Teshima Affair”. This rich natural environment includes land designated as national park in the Mizugaura area which was the setting for the “Teshima Affair”. This area affected by industrial contamination also contains three archaeological sites.

Although 18 prehistoric and ancient sites have been surveyed and located on Teshima, use and promotion of these ruins is limited because few people know of their existence. Consequently there is no detailed explanation of the sites and archaeological material recovered from them and most people have no knowledge of these sites.

In an attempt to change this we have been conducting public archeology fieldwork in Teshima since 2007 and have undertaken various practical activities. Through this experience, we understand that archaeological research and future public archeology at these sites is not limited to an educational program of increasing archaeological knowledge through the separation of research and practice.

The use of citizens in public archaeology at the sites produced research themes and in turn research application creates a cyclic effect between necessary research design, the public and presentation.